

柏市における商業地域構造

角 川 美也子

上野から常磐線で約30分、大手町まで地下鉄で45分のところに位置する衛星都市柏市において、“都市再開発法”による“柏駅東口市街地再開発事業”が行なわれ、48年に完成を迎えた。自然増よりもむしろ流入によって急速に増加していく人口をかかえて、駅前を整備し、充実させようとするこの事業は、必要なものであった。しかし、完成した商業ビルなどを見ると、意図的な商業都市づくりといった感じも受ける。このように、急速に商業機能が拡大・充実していく過程をみているうちに、柏は、商業都市としての性格を備えつつあるのではないか、つまり、柏市にとって、地域的特性ともいえるのは、商業ではないかと思ったのである。そこで、柏市の、とくに商業に注目して、その地域性を考えてみようと思った。

本論文では、まず、柏市の概要を述べ、統計資料によって、柏市の商業を、県内で位置づけてみた。ここでは、他の衛星都市では、一般に低い1人当たり売上高が、柏市では、県平均を上回っており、とくに買回品において、それが高いことが判明した。このことから、柏の商業は、再開発以前から、ある程度の水準にあったことがわかる。柏市の実際の商業については、メッシュ統計を用いて商業地域を検出し、その中の商店街をとりだして特性を考えた。これに用いたのは、商店街ごとの業種で、この比率から、商店街を分類し、それぞれの商業地域の性格を考えた。その結果、柏駅前の商業地域とその団地周辺の商業地域とでは、明らかに質的に異なっていると思われる。前者は、買回品を中心として、一部の周辺都市からも顧客を吸引しているのに対して、後者は、最寄品中心だから、さほど広い商圈は、もち得ない。その上、再開発事業の結果、さらにこの傾向が強まっていくものと思われる。

最後に、柏市において、商業が、とくに柏駅前において活発になったのは、交通に依るところが、かなり大きな要因だと思ふ。常磐線と東武線との連絡駅であったということと、東京方面への鉄道機関が、千代田線の乗入や快速の停車によって、しだいに、改良されてきたことである。都市全体の商業に関しても、このような交通の影響を受けていると思われる。

児島湾干拓地における農業の変貌

北 村 喜久子

本論文は岡山県南部に広がる児島湾干拓地を干拓年代に沿って①興除②藤田③7区に分け、農業とそれを支えてきた水との関係を中心として、比較しつつ地域を把握しようとしたものである。

本地域は、米麦二毛作にい草を加えた比較的大規模な農業が展開し、専業農家が大部分をしめる純農村地帯であった。しかし県南の新産業都市指定等による農業労働力の流出を契機に、昭和35年頃から急変する。